

【第4回】明治・六会・湘南台、分割と統合の歴史

藤沢地名の会 会長 佐々木道雄

第一部：明治地区

第1章. 明治地区の特徴

- 明治地区は東海道線の北側で、元来は辻堂地域の北部と旧羽鳥村の地域を合わせた地域。
- 中世末期までは羽鳥に豪農三背家を含む集落があっただけ。他は松林と砂地。
- 現藤沢バイパスと東海道とが合流する四ッ谷は東海道と田村通大山道の分岐点で茶店や旅籠で賑わっていた。
（加藤徳右衛門の著書『藤沢郷土誌』によれば、「明治維新までは茲を中心に街道の左右は人家稠密たる紅灯の巷で---（中略）---江戸の酔客は此の四ッ谷を唯一の享樂の場所となし、常に絃歌の絶ゆることなき殷賑さを極めた」）近くには不動堂があり、延宝四年（1676）銘の不動明王が祀られている。



【写真4-1：不動堂と不動明王】（筆者撮影）

第2章. 明治地区の地名由来

- 明治22年、羽鳥村・大庭村・稻荷村・辻堂村が合併して明治村が誕生。明治41年（1908）には藤沢町の一部となり、昭和15年に藤沢市となる。【資料2：藤沢市域行政区画変遷表】を参照。
- 行政区画である「地区」の名称が「明治地区」と付けられたのは、明治22年の村名が由来か。
- 明治地区には2つの大字がある。該当する小字図は【資料8：辻堂地域の小字】を参照。
- 大字と特徴的な小字を取り上げ、その由来を説明。

1. 大字「辻堂」

（1）大字「辻堂」地名由来：割愛

（2）明治地区に所在する「辻堂」の小字の地名の由来

① 動植物など生物に因む小字名

ガル池（がるいけ）：この地は池や沼がたくさんあり、蛙が多かったとか、カルガモが飛んできてくことに因むといわれる。

② 民俗・信仰に因む小字名

西神台（にしかんだい）・東神台（ひがしかんだい）：平安時代以降、大庭、鶴沼から辻堂、茅ヶ崎一帯は大庭御厨として伊勢神宮の所領。領域内の各地には

伊勢神宮が祀られたことに因む。現在はテラスモールとなって賑わっている辻堂駅北口前には、１９１８年に関東特殊製鋼本社辻堂工場が開設された。

③ 人間の営みに因む小字名

土打（つちうち）：土打とは開墾後に土の塊を砕いて整地し、麦類、陸稲を刈り取った後、その切り株を鋤（くわ）でさくりあげ、打ち砕く作業。この辺りは荒れ地で農民が荒れ地を開墾したことを示す地名、明治公民館裏の公園にその名が残されている。

④ 大昔の出来事に因む地名

餅塚（もちづか）：ここは作物の取れない砂地。耕地面積が増えると年貢など村民の負担も増える。大庭と辻堂では耕地の押し付け合いになったが、大庭村が勝利し、この地は辻堂村の持ち分となった。大庭村の農民は餅をついて祝ったといわれる。

２．大字「羽鳥」

（１）大字「羽鳥」の地名由来

下記の二説がある。

① 『皇国地誌』：

「本村三觜八郎右衛門-(中略)-元和元年（１６１５）大坂落城ノ後此辺ニ来リテ居ヲトス、偶一地ニ 三鶴ノ遊ベルヲ見、佳トシテ茲ニ住シ、遂ニ帰農シテ三觜翁助ト改メ該地ヲ開拓シテ羽鳥ト村名スト-(後略)-」

② 蘇我・物部氏の時代に、この地に住んでいた織物を作る一族である秦氏の服部（はとりべ）から転訛。



【写真４－２：三觜家主屋】（筆者撮影）

昭和の初め頃まで殆どが農家で、その耕地の大部分は大三觜（おおみつはし）と呼ばれる三觜本家が所有。本家の主屋を写真４－２に示す。

（２）「羽鳥」の小字の地名由来

① 人間の営みに因む小字名

四ッ谷（よつや）：四軒の家があった事に因む。この辺りは東海道と田村通り大山道の分岐点で大山詣で目当ての旅籠や茶店で賑わっていた。

汲田（ぐみだ）：この辺りの田は水源がなく、雨が少ない時のみでなく、１０年に一度位は全く田植えが出来ないときもあった。このため、地面を掘り下げてにじみ出た水を汲み上げていたことに因む。

第二部：六会地区

第１章．六会地区の特徴

- 明治２２年に六会村が合併により誕生した。６つの村、「石川」・「亀井野」・「西俣野」・「円行」・「今田」・「下土棚」は大字となった。
- ２４平方キロメートルの広大な面積をしめ、住民の７割は農民。
- 「六会地区」は、６つの大字のうち、昭和４６年に「下土棚」が「長後地区」に移管、平成元年に新設の「湘南台地区」に「円行」・「今田」の大部分が移管。「六会村(大字)」から「六会地区」への変遷は図４－１を参照。

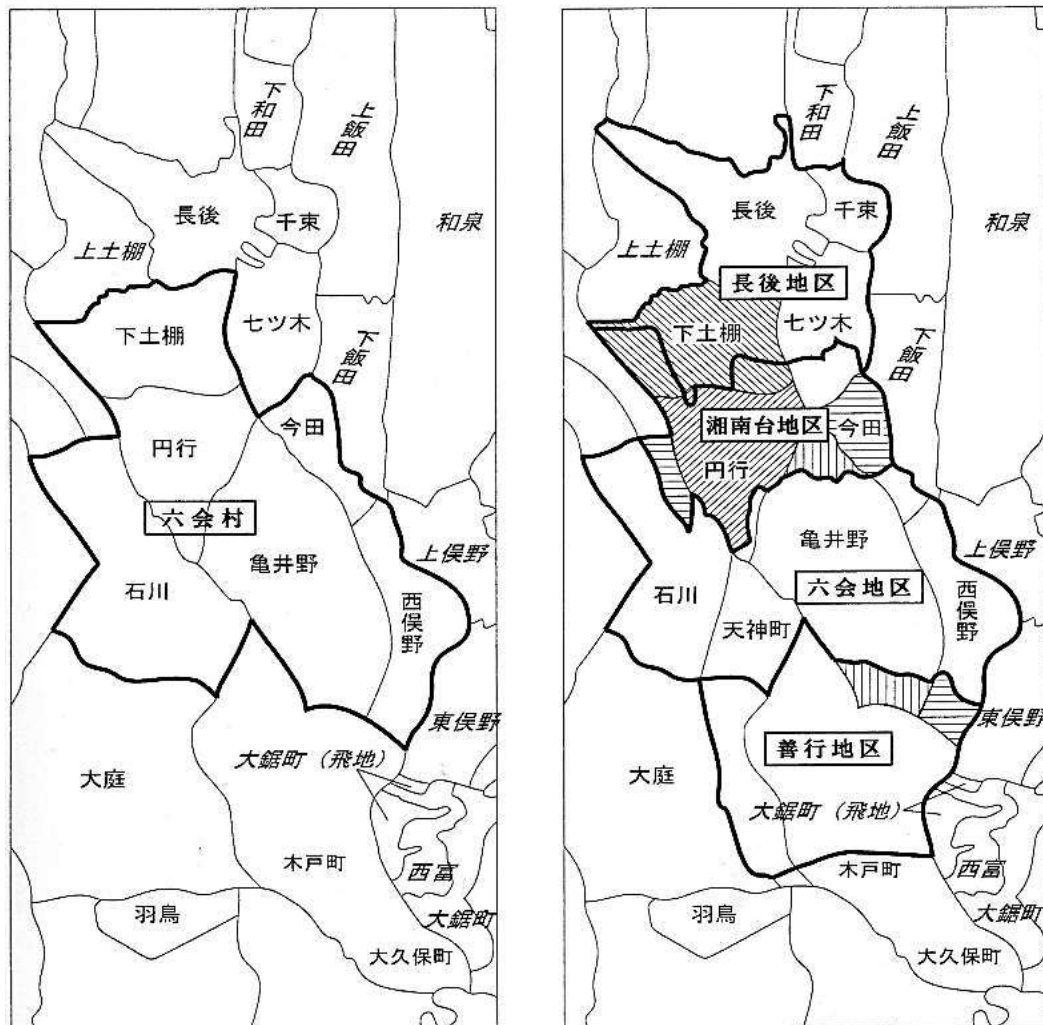


図４－１：近世村(大字)・六会村・藤沢市内地区区画の対象図

出典：六会地区郷土づくり推進会議「六会地区歴史年表」(2017)

第２章．六会地区の地名由来

明治２２年に六会村が合併した際に、「六つの村が会う」に因む。群馬県には明治３３年（１９００）草津村から６村が分離して「六合村」となった類似例があるが、「くにむら」という難読地名である。小字名は【資料１１：六会地域の小字】を参照。

1. 大字「石川」

(1) 大字「石川」の地名由来

「石川」とは底が浅い川という意味。辺りは古相模川が作った相模野礫層の砂利が露出。この地域の下流部は昔、湖だったといわれ、戦後、河川改修が行われるまでは水が溢れることが多い水田地帯でした。天正18年(1590)、豊臣秀吉が出した禁制に石川の地名が書かれている。

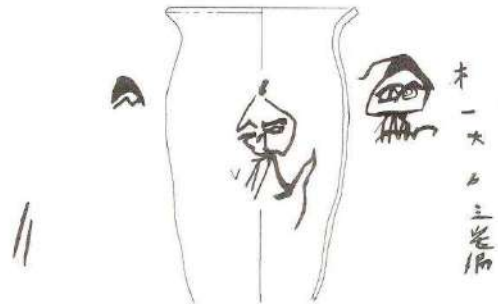
(2) 「石川」の小字の地名由来

① 民俗・信仰に因む小字名

権現庭(ごんげんにわ)：石川村には昔、一から六までの組と、東という組を合わせて七つの組に分かれていた。東組の人々により祀られた権現神社に因む地名。

② 人間の営みに因む小字名

鍛冶山(かじやま)・南鍛冶山(みなみかじやま)：大庭城の刀鍛冶がいたからという説、刀剣や農具を造る野鍛冶がいたという二つの説がある。この地の南鍛冶山遺跡は市内最大の遺跡で、奈良・平安時代のもと思われる多くの鉄製品や、甕に人の顔が描かれている土器の人面墨書土器が出土。



【図4-2：人面墨書土器】

転載：『南鍛冶山遺跡発掘調査報告書
第4巻墨書・刻書資料』 p18

和泉原(いずみはら)・田島屋敷(たじまやしき)・田島山(たじまやま)：『新編相模国風土記稿』には「西山土佐・内嶋和泉・佐川図書・田城加賀・市川越後・伊沢伊織」の石川六人衆が記載される。六人衆は小田原北条時代にこの辺りを知行し、徳川時代になって帰農した。

一の坪(いちのつば)：大庭郷に属した当地では、奈良時代に耕地の条里制ができ、何条何里何坪と呼ばれ、最初の小区画を「一ノ坪」と呼んだ。

2. 大字「亀井野」

本地区に所属するのは北端を「湘南台地区」、南部を「善行地区」に移管した残りの大部分。

(1) 大字「亀井野」の地名由来

源義経の家臣亀井六郎重清が現亀井神社である不動堂を建立したことに由来。天正18年(1590)、豊臣秀吉が出した禁制に亀井野の地名あり。昭和18年に日本大学農学部(現生物資源科学部)が設立される。

(2) 六会地区に所在する「亀井野」の小字の地名由来

① 動植物など生物に因む地名

狼谷(おおかみやと)：昔、亀井神社の不動尊に参詣に来た人が、この辺で狼に出会い、食べ物を譲り合ったという伝説が残る。

② 民俗・信仰に因む小字名

不動前(ふどうまえ)・不動上(ふどううえ)：亀井野村の鎮守である亀井神社の不動

明王に囚んでつけられたか。

③ 人間の営みに因む小字名

上屋敷（かみやしき）・下屋敷（しもやしき）：江戸時代、亀井野村は大久保、岡部両氏の領地。前者の土地を「上分」、後者の土地を「下分」と呼ぶ。地名はこれに由来。

3. 大字「西俣野」

本地区に所属するのは南部を「善行地区」に移管した残りの大部分

（１）大字「西俣野」の地名由来

「俣野」という地名は『吾妻鏡』（建久６年１１月１９日の条）に「大庭御厨俣野郷」と書かれた古い地名。境川をまたいで広がった野という説と現横浜市区から流れくる和泉川とこの辺りで合流する川が二股に分かれた地形に由来するとの二説がある。石川村・亀井野村と同様戦国時代から伝わる地名。

（２）六会地区に所在する「西俣野」の小字の地名由来

① 人間の営みに因む小字名

小栗塚（おぐりづか）・小栗塚下（おぐりづかした）：小栗判官が土葬された塚があったといわれる。西俣野に住む横山大膳の一人娘である照手姫は大変美しく、常陸國小栗城主である小栗判官満重は照手姫に結婚を申し込む。しかし、大膳は反対し、毒酒を盛り、満重を殺害。この伝説に因む塚である土震塚（すなふるいづか）が今も残る。

大塚（おおつか）・四ツ塚（よつづか）：平安・鎌倉時代、この辺りが戦場だったころ、戦死した兵を祀った塚があった。八王子道の近くにあるので、道標として建てられたとの説あり。

② 大昔の出来事に因む地名

御所ヶ谷（ごしよがや）：小栗判官と恋仲であった照手姫の御所があったところといわれる。

第三部：湘南台地区

第Ⅰ章．湘南台地区の特徴

- 小田急線湘南台駅開設とともに急増した人口に対応するため、「湘南台地区」が平成元年新設。
- 昭和５９年北部第一土地区画整理事業の完成。対象地の今田・円行の大部分が「六会地区」から移管、亀井野・高倉・下土棚の一部を含めた地区が「湘南台地区」として平成元年に編成。
- 地区の再編成で新たに設置された点が特徴的。地区の範囲は「六会地区」で参照した【図４－１：近世村(大字)・六会村・藤沢市内地区区画の対照図】を参照。小字名は【資料Ⅰ：六会地域の小字】を参照。いすゞ工場がほぼ全域を占める大字「土棚」は除く。

第２章．湘南台地区の地名由来

- 昭和４１年に小田急線湘南台駅が長後一六会（現六会日大前駅）駅間に新設。
- 駅名は地域住民の声をもとに名付け。地区の命名は駅名からと想定。

１．大字「円行」

（１）大字「円行」の地名由来

「円行」という地名は、下土棚との境に近い引地川東側にあった円行寺（廃寺）に因むといわれる。付近の川底には五輪塔の残欠や僧侶の墓である卵塔が沈んでいるといわれ、付近の田からは康永２年（１３４３）銘の板碑が出土し、寺の存在は裏付けられる。

（２）「円行」の小字の地名由来

①人間の営みに因む小字名

馬渡（まわたり）：昔、大庭城は引地川の水を堰き止めて堀にし、この辺りまで川が深くなり、馬で川を渡ったといわれる。

上河内（かみごうち）：引地川の沖積地に出来た田を示す。

２．大字「今田」

（１）大字「今田」の地名由来

昔は「亀井野村」の一部だったといわれ、新しく開かれた田の意味ではないかと思われる。秀吉の禁制には今田村の名が書かれている。

（２）「今田」の小字の地名由来

①人間の営みに因む小字名

古道（ふるみち）：江戸時代に、現在の藤沢一町田線は滝山街道（八王子道）と呼ばれていた。その前には東側にも道があり、裏道とも呼ばれた。この道は今も一部残っており、小字名になっている。

３．大字「亀井野」の一部

（１）湘南台地区に所在する「亀井野」の小字の地名由来

四ツ辻（よつじ）：滝山街道（八王子道）の北端辺りでは、亀井野村・円行村・今田村・高倉村の四か村が交わっていました。これに因んで名づけられた。亀井野の最北端で番地は１番地から始まる。なお、隣接する円行村にも同名の小字がある。



【写真４－３：現在の四ツ辻】（筆者撮影）

<引用参考文献>

- 『藤沢の地名』 日本地名研究所編 平成９年(第３版) 藤沢市
『市民が歩んだ８０年－「藤沢らしさ」を求めて－(続)藤沢市史別編４』
2021年２月 藤沢市
『歴史をひもとく藤沢の資料 ４．湘南台地区』 2019年３月 藤沢市文書館
『歴史をひもとく藤沢の資料 別巻中世文書』 石塚勝 著 2021年３月 藤沢市文書館
『藤沢郷土誌』 加藤徳右衛門 著 昭和８年・昭和５５年復刻 国書刊行会
『新編相模国風土記稿』 昭和３７年・平成１０年４月改訂 雄山閣
『藤沢市史資料集(十一) 村明細帳・皇国地誌村誌』 昭和６１年１１月 藤沢市文書館
平成１４年度 藤沢市生涯学習大学テキスト
『藤沢の地名～自然地名の由来をさぐる』 小林政夫 著
平成１６年度 藤沢市生涯学習大学テキスト
『歴史を刻む地名～藤沢の歴史地名をめぐって』 湯山学 著
平成２５年度 藤沢市生涯学習大学テキスト
『地名が語る藤沢の成り立ち』 仲摩邦夫 著
平成２９年度『地名探訪配布資料 六会(俣野)地区』 藤沢地名の会
令和３年度『地名探訪配布資料 六会(石川)地区』 藤沢地名の会
令和３年度『藤沢地名の会 研究発表論文(続)つれづれの地名』 小瀬川雅彦 著
『藤沢市地名調査報告書(Ⅱ)、(Ⅲ)』 日本地名研究所 著 1985年 藤沢市
『南鍛冶山遺跡発掘調査報告書 第４巻 墨書・刻書資料』
藤沢市教育委員会編 1997年
『現代語訳 吾妻鏡⑥』 五味文彦・本郷和人編 2009年 吉川弘文館